

〔研究課題〕 子宮体部類内膜癌症例における腹水細胞診陽性の細胞学的・臨床的意義に関する研究

〔研究目的〕 本研究は、子宮体部類内膜癌手術症例において術後の化学療法を選択に術中腹水細胞診が果たす役割を明らかにすることを目的とします。

〔研究意義〕 子宮体部に発生する悪性腫瘍の大部分は類内膜癌というがんです。類内膜癌は比較的早期のがんであっても子宮につながる卵管という管を通して、がん細胞が腹腔に散布されることがあります。これまで国内外で実施された研究では、比較的早期のがんであっても腹腔にがん細胞がみられる場合（腹水細胞診陽性と呼びます）は再発のリスクが高く化学療法が必要であるとするものと、再発はほとんどみられないため化学療法は必要ないとするものがあり、一定の見解が得られていません。本研究では腹水細胞診陽性例の再発リスクを他のさまざまな因子と比較・検討し、子宮体部類内膜癌治療の選択における有用性を検討するものです。

〔対象・研究方法〕 2001年1月から2021年7月の期間に当院で子宮体部類内膜癌の外科的切除と腹水細胞診を受けた患者さんを対象として、臨床情報、治療法、病理学的因子について後方視的に検索し、再発のリスク因子を抽出します。研究にはこれまでに手術で取り除かれた病理標本を用いますので、対象となる患者さんに新たに負担をお掛けすることはありません。

〔研究機関名〕 帝京大学ちば総合医療センター 病院病理部

〔個人情報の取り扱い〕 当院は、ヘルシンキ宣言および臨床研究に関する倫理指針に則り、患者さんの人権を守るよう配慮して研究を行います。取り扱うデータは対象となる患者さんの、カルテ番号、年齢、診療情報（診断名、病状や治療期間、治療効果等）を使用し、お名前や住所、電話番号などが使用されることは一切ありません。

帝京大学ちば総合医療センター病院病理部教授 山崎一人  
帝京大学ちば総合医療センター産婦人科教授 梁 善光